
大伴の名の下に！

霜雪院竹夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大伴の名の下に！

【Nコード】

N8379Z

【作者名】

霜雪院竹夫

【あらすじ】

注：この物語は受験の鬱憤を晴らすために推敲されております。十五歳の品川敬嬢は、日本生まれ、韓国育ち。日本の何処の『衛府市』に住んでいた彼は、小三の時以来の帰郷を果たすことに。

ところが、そこに向かうはずが、衛府行き駅のホームに、春から通うはずの『衛府東高校』の制服を着た美少女がいて……？
「敬嬢……さんですか」「いや、先輩なんでしょ？敬語は無いですよね」「……っ」

地の字が足りない作者が送る、やけに背の低い少女・大伴絢佐と

その仲間達が繰り広げるドタバタコメディ！

第? : ? (前書き)

忠告。

おかしいな文面・誤字脱字在り。

・ ・ ・ ・ ・ まちがえた、あ、まちがえた。 在る 有る。

第? : ?

俺、品川敬壊は、大伴絢佐さんと共に駅のホームへ急いだ。

身長の低い少女・・・もとい大伴絢佐は、どうやら一つ上の先輩らしい。

彼女も二時半発の電車に乗るといっているので、二人で行くことにした。

「二時半・・・まだ時間ありますけど」

絢佐はそう呟いた。さらさらと黒髪が揺れている気がする。

「いや、先輩なんでしょう? 敬語は無いですよね」と思わず言った。すると驚いたように「・・・っ!?!?・・・ううう」。

当然のことを言ったのだが、絢佐は矢が刺さったような顔をしていた。

なんだ、この人。

そんな感じでやり取りしていると。

十一番線、十一番線に電車が参りまーす黄色い線までお下がり下さい

スピーカーから駅員の声が響く。

軽快というかすっぱ抜けているような・・・アナログかよ。

他の路線は録音の声じゃん。

「んじゃ、行きましよう」

俺は、絢佐の顔を見る。

どうしても、年下に見える。背、低いし。

・・・あれ? 向こうにも、何人かちびっ子がいたような気がするなあ。

電車は二両編成だった。オレンジと緑の・・・ええと・・・何か系。ローカルだけどね。

ホームに降り立った人は六、七人だけで、車両点検もすぐに終わった。それも、一分くらいで。

そして、中に入ると、昭和の暖かい（なんだそれ）雰囲気を持つたふかふか座席。

うお。なんだこのゆったり&まったりは。

向かい合っている団体席（北側）を確保すると、絢佐は後ろ側、つまり東京方面の窓際を選択した。

敬壊もその向かいの席に腰を下ろす。大きい荷物が向こうに送られてはいるはずなので、持っているのは財布やケータイなどの貴重品だけだ。

そういえば・・・と敬壊は思った。絢佐の荷物が全く見当たらない。今は携帯電話で何かしているようだが、それ以外何も所持していないのだ。

おかしい。

だが、なんとなく気が引けて、声を掛けられなかった。というか、それほど彼女の顔が憂えていたのである。

不思議に思いつつ、俺は脳内思考で再復習。

ここでなんだが、衛府についてもつと詳しく話したい。

衛府という地名は、日本では鎌倉時代に作られたらしい。

なんでも、地頭が唯一入ることの出来なかったという荘園が元だという。

更にその前は『回富』と書いて『えふ』と読んでいたらしい。由来は不明。一説によれば、回富伝説というものがあるとか。

・・・回富の神さん舞いければ、その町この村栄にけり・・・
むかーしむかーし、或る所に回富という神さまがおった。
その御方はいにしえより倭の国や大陸の人々を救ったそう
な。

そんなある日、その御方が美しい夕日を見たそう。

それに魅せられたその御方はその地に住み込み。
その場所は回富と呼ばれるようになったとな。

「……………らしいです。いや、これは俺の母親
祐里子の談ですけど。よく覚えてるな、なんて思った人、それは違
うぞ。」

「なんたって、ここにそれが記された手帳があるからな。ふふん、
ざまあ見ろ（何が）。」

「うん。ごめん。昔話も、衛府の由来も、手帳からなんだ。」

「……………ごめんなさい。いや、申し訳

「け……………し、品川さん？何をブツブツ言っているんですか」
「あ。漏れていたみたいだ。すみません。」

「……………おかしい人」

「どうやらそのようで。ご、御尤もに御座る。……………言い直す、」
「もっともにござる！繰り返す、ご尤もに御座った！」

「本当になんなの！？」

「どうやら俺は『バカ』みたいだった。」

「絢佐の初突つ込みをいただいた。……………もともとあまりそうい
うのが得意じゃないのか、顔が真っ赤なのは……………気のせい、気の
せい（白い目線という意味合いで赤くなってると思う）。」

「十一番線、電車が発車いたしましたーす、衛府行きです
電車のアナウンスが掛かって、ガコンと車両が動き、駅が揺れる。
……………ように見える。」

「携帯電話を取り出す。」

「着信有り。」

「「題：無題 本文：お母さんが駅まで迎えに行くそうです」」

杉原奈帆。俺、品川敬嬢の幼馴染みであり、祖母だったか祖父だったか西洋系のお母さんがいる来年高校一年生。・・・つまり。瞳が青い。

彼女についての記憶はこんなのしかない。

『幼馴染み』とか言っているくせして、そんなことしか知らないのかと思うのだが、本当に覚えていない。思い出せない。・・・悲しいことに・・・だ。

返信。

「 題：了解 本文：助かります」

数十秒後。

「 題：無題 本文：なんかそっけないなあ。ほんと、変わんないよね。」

ところで、私の顔、覚えてる？」

ぐ。なんでこう、一番痛いところを突くんだこの女。しかも今考えてたことじゃないか。

「 題：無題 本文：まだはつきりとは」

「 題：無題 本文：えー、なにそれ（笑）ひどいなあ、敬ちゃんは」

・・・すまん。そのまま返そう。

「 題：すまん 本文：なし」

「 題：無題 本文：・・・」

「……。」

「……品川さん？・大丈夫ですか」

「え？……あ、ああ。ありがとうございます。大丈夫です」

大伴絢佐に心配されるほどグサツときたのは認めよう。いや、認めざるを得ん！もう開き直ってやるわ！何がいけなかったとかもう良いわい！

「ほんと、大丈夫なんですか。……誰です？」

さりげなく俺の人間性を否定されている気がする。

主に精神面。

「杉原奈帆っていう……俺の知り合いです。……ま、尤も、顔、覚えてないんですけどね」

普通に答える。幼馴染みという例えは使いたくなかった（それは前の文でなんとか汲み取って欲しい）ので、「知り合い」と言ってしまうた。

本当は、『すんごく会いたいです』とか言つべきなんだろうか。いや。

もう、過ぎたことだし。

すると、絢佐は一瞬どこか残念そうな表情を浮かべ　自分のケータイの操作に入り出したので、俺は山を遠くに望む水田風景を眺めつつ、電車に揺られていった……。

これぞ、二両編成という気楽さ。

東京の満員電車など、もう体験したくない。

いや、実際、高崎までに行くまでになっただけどき、あれは凄絶だよ。死ぬかと思った。

……真面目に。

さあ、衛府に行こう。

希望に満ちた街に。

仲間がいる街に。

.....。

たぶん、いると思っ。

皆の記憶から消去されていなければ。俺のよっに。
て。

俺が忘れてどうすんだよー！

第? : ? (後書き)

私立の高校受験前!

出撃イ! ! ! !

.....というのですが、親に怒られます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8379z/>

大伴の名の下に！

2012年1月3日01時52分発行